

(財) 国際通貨研究所
経済調査部長・チーフエコノミスト
竹中 正治

「キャリアウーマン・ルールズ」、著者：横江公美
～できるオンナの黄金法則 11～
フェロモンを駆使して仕事社会を駆け上がれ

ヒラリー、ライス、聖子と百合子のオンナ術：掲載タイトル

【オトコ・タイプ 対 オンナ・タイプ】

働く女性をめぐる時代のキーワードは、「キャリアウーマン」から酒井順子の「負け犬」を経て、安野モヨコの漫画「働きマン」へと移り、かつて男性が独占していた日本人の仕事のエートスはその軸を女性へとシフトさせているようだ、などと感じ始めていた矢先、とうとうこんな本が出てきた。

著者の横江は「Part1、オトコ社会で生き残る」でキャリア女性を「オンナ・タイプ」と「オトコ・タイプ」に2分類する。オトコ・タイプの典型は、アメリカ大統領候補の予備選を戦っているヒラリー・クリントンである。彼女に代表されるオトコ・タイプは仕事の実績で認められることが第一優先であり、そのためなら「頑張り過ぎる」傾向があり、服装はスカートよりパンツを好む。仕事能力へのプライドが高いので、女であることを利用した「女戦略」を利用することは「恥ずべきこと」として封印される。なるほどね。そうすると、ヒラリーがオバマとの熾烈な党内予備選挙で見せた「なみだポロリ戦略」は、オトコ・タイプの彼女がプライドをかなぐり捨て、禁じ手を使うところまで追い詰められた結果と理解できる。

一方、オンナ・タイプの代表はブッシュ政権で国務長官になったコンドリーザ・ライスだと言う。「ええっ？ライスのどこに女のセクシーを感じるのか？」と思うのは、筆者を含めて読みが浅いためだ。横江に言わせるとライスは「ワークアウトでボディーラインを保つ。女性らしいデザインのひざ上スカートのスーツに、ラルフ・ローレンのコート、フェラガモの靴、そして口紅はイブ・サンローラン」とお洒落に余念がない。ボス（ブッシュ大統領）には絶対の忠誠を尽くし、反対意見は唱えない。「オンナ・タイプは、どんな時でも権力者である男性の嗜好を忘れない」、要するに今だオトコ社会であることを十分に認識し、それを受け入れた上で、「権力者に好かれることが出世への早道であることを理解している」マキャベリストであると言う。

オンナ・タイプのもう一つの特徴は「オンナの魅力：フェロモンを活用する」ことにある。ただし、ここで言うフェロモンとは「セックス・アピール」ではない。単純な「セックス・アピール戦略」は中傷や同性（女性）からの反感をかって失敗するリスクが高い。「セックスの匂いのしないフェロモン」を上手く操れるかどうか、それがオンナ・タイプが仕事社会で生き残れるかどうかの鍵だと言う。

【「ハリネズミ・オンナ」を乗り越えて】

2大分類、オトコ・タイプとオンナ・タイプから幾つかのバリエーションが生じる。両方のカテゴリーのどちらにもまだ分化していない発展途上の「バリキャリア派」は、バリキャリア・ファッションで決めている20代、30代前半の若い女性である。

「自分だけ苦労している」「報われていない」「自分が苦労しているのだから、他人も苦労すべき」という考えに陥ってしまうのは「ハリネズミ・オンナ」で、キャリア女性が初めて責任あるポストにつくと責任感のプレッシャーと不安でハリネズミ化する危険がある。もっとも、能力の高い女性、良い上司の指導に恵まれた女性は、針からの脱皮に成功する。一方、お局化するハリネズミは周囲の同僚にとっても危険な存在になる。また、結婚退職という道を選び「女の幸せ光線で自分の針を溶かす」人もいる。

出世の野心を捨てて会社の快適さに身を任せる「オバサン・タイプ」に変貌する人もいる。オバサン・タイプの中には社内で「癒し系」の地位を築き、社内の残存利益を獲得する可能性もあると言う。まことに環境に適合する道は人様々である。

【日本の政界はオンナ・タイプが主流】

「Part2、戦う日本のオンナたち」では、幾人かの日本のキャリア女性が横江オンナ分類学の対象となる。なかでも「日本最強のオンナ・タイプ」は小池百合子だそう。小池百合子の凄いところは、オンナ戦略を駆使して権力者にひいきにされることを最大限に活用するが、それに甘んじず、利用関係のギブ・アンド・テイクを実行することにある。取り立ててくれた上司には徹底的に尽くし、郵政問題の衆院選挙では「刺客」となって立候補した。しかも、お世話になった相手でも「切る時はすっぱり切る」決断力があると言う。

一方、オトコ・タイプは日本の政界では少数派であるが、古い世代では土井たか子、次世代では辻本清美、野田聖子などが分類される。野田聖子は基本的にはオコト・タイプであるが、「ボーイッシュな雰囲気と健全な色気、そして愛嬌のある健康的な魅力」で、自民党国会議員のシニア・オジサマ方の眼に「一生懸命がんばっている自分の愛娘とイメージが重なり」、絶大な人気を勝ち得たタイプと分析される。

【万能オンナ・フェロモンの威力】

総合的に評価すると、横江の観察する限り、「フェロモンを活用できるオンナ・タイプは、羞恥心をものともしない現実主義の戦略家」であり、男性上司が圧倒的な現状では成功する確率が一番高い。最終章の「Part5、できるオンナたちの新ルール」では仕事社会で生き延び、成功するための11のルールがまとめられている。

オトコ・タイプ、オンナ・タイプと言っても相対的な問題である。「仮にあなたがオトコ・タイプであったとしても、オンナ・フェロモンを上手に使えるようになった方が戦略的に有効であると言う（Rule2）。ただし、老若男女を問わず誰からも支持されるセックスの匂いのしない万能オンナ・フェロモンを醸すことがポイントであり、そのためには職場では「モテたい」エッセンスは封印すべきだ。

更に「オンナ同士の悪口は言わない：Rule5」「“性悪女”をのさばらせない：Rule6」などが展開する。特に「性悪女フェロモン・オンナのせいで、オンナ・タイプが正当に評価されなかったから、オンナを封印するオトコ・タイプが登場した。」残念ながら、男性に性悪女フェロモン・オンナを見破ることを期待するのは無理だと言う。なるほど、性的な興奮は理性的な判断を司る「大脳新皮質・前頭前野の血流を低下させる」と東京大学の先生もNBonlineで書いていたくらいだから、確かにその通りだろう。

また「結婚はした方が、お得：Rule8」など本音のオンナ戦略がガンガン展開される。ところが、横江自身は「自分はフェロモンなしタイプ」で、かつ結婚する見込みもないようだ。ふ～ん、観て判るということと、実践できるということは別なんだね。

想えば、星一徹と飛馬の時代は古の物語となり、今や時はアニマル浜口と愛娘京子ちゃんの父娘バトルチームの時代だ。21世紀、男性世界はいよいよ「万能オンナ・フェロモン」を身にまとった働きウーマンに席卷される時代を迎えるのかもしれない。

以上